

本文

- ① これは、なくてはならぬ物なり。
- ② 国王の仰せごと、背くべきにあらず。これは王の御使ひなり。
- ③ 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。（『土佐日記』）
- ④ 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる。
- ⑤ あなたの山に、僧こそあなれ。（人の話す声から、そこに僧がいるらしいと推し量る場面）
- ⑥ 君は今ぞ天下の主たり。よく国を治めたまへ。
- ⑦ 堂々たる軍勢、野を埋めて進みけり。
- ⑧ この所、昔は都なりき。今は野となれり。
- ⑨ 舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。
- ⑩ 月日は百代の过客にして、行きかふ年もまた旅人なり。（『おくの細道』）
- ⑪ 人の語るを聞けば、唐土には不思議のこと多かなり。
- ⑫ われは関白の子たりしが、世を捨てて山に入りぬ。
- ⑬ 谷の底に水の流るる音なり。耳を澄ませばよく聞こゆ。
- ⑭ この城、国の要害たり。攻むとも容易には落ちじ。
- ⑮ 竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。（『竹取物語』）
- ⑯ かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。

※①②⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑯は学習用のオリジナル例文です（③は『竹取物語』、④は『土佐日記』、⑫は『おくの細道』からの引用）。

設問

1. ①の「なり」の文法的意味を答えよ。
2. ②の「なり」の直前の語「御使ひ」は何という品詞か。これによって、ここでの「なり」は断定か推定・伝聞か、いずれと判断できるか答えよ。
3. ③「するなり」の「なり」について、次の小問に答えよ。
 - (1) 直前の「する」の活用形を答えよ。
 - (2) この「なり」の文法的意味を答えよ。
4. ⑤「あなれ」を単語に分け、もとの形（終止形）にもどして示せ。また、この「なり」の文法的意味を答えよ。
5. ⑤の「なり」は、直前のラ変動詞「あり」のどの活用形に接続しているか。撥音便を考慮して答えよ。
6. ⑥「主たり」の「たり」の文法的意味を答えよ。

7. ⑥「たり」の直前の語「主」は体言である。この事実、ここでの「たり」が断定であることの根拠となるか、ならないか。理由とともに答えよ。
8. ⑦「堂々たる」は、学校文法では一語で何という品詞・活用に分類されるか。活用形とあわせて答えよ。
9. ⑧「都なりき」の「なり」の文法的意味と活用形を答えよ。
10. ⑧「昔は都なりき」を現代語訳せよ。
11. ⑩「旅人なり」の「なり」の文法的意味を答えよ。また、直前の「旅人」の品詞を答えよ。
12. ⑪「多かなり」の「なり」の文法的意味を答えよ。また、そう判断できる根拠を、接続の面から簡潔に述べよ。
13. ⑫「子たりし」の「たり」と、その下の「し」について、次に答えよ。
- (1) 「たり」の文法的意味を答えよ。
 - (2) 「たり」の活用形を答えよ。
14. ⑬「音なり」の「なり」は断定・存在・推定伝聞のいずれか。文脈をふまえて答えよ。
15. ⑭「要害たり」の「たり」の文法的意味を答えよ。また、断定の「たり」はどのような文章・どのような語に付きやすいか、簡潔に述べよ。
16. ⑨「すみか」と、⑬「音なり」の「なり」を比べる。断定の助動詞「なり」が「に+あり」から生じたのに対し、「たり」は何+「あり」から生じたか。⑨の「と」と関連づけて答えよ。
17. 次の各文の「なり」について、断定であれば「断」、推定・伝聞であれば「推」と答えよ。
- (1) ①「ならぬ物なり」
 - (2) ⑤「僧こそあなれ」
 - (3) ⑪「多かなり」
 - (4) ⑩「旅人なり」
18. 断定「なり」と推定・伝聞「なり」は、活用語に接続する場合、接続する活用形が異なる。それぞれどの活用形に接続するか答えよ。
19. ④「おどろかれぬる」の「ぬる」、⑫「子たりし」の「たり」について、これらは断定の助動詞か。違う場合はそれぞれ何の助動詞か答えよ。
20. 次の傍線部を現代語訳せよ。
- (1) ⑩「行きかふ年もまた旅人なり」
 - (2) ⑥「君は今ぞ天下の主たり」
21. 断定の「なり」「たり」は、どちらも「ある語+あり」が縮まって成立した。なぜラ変型に活用するのか、その理由を成り立ちの面から説明せよ。(記述)
22. 「なり」が断定か推定・伝聞かは、しばしば直前の語の形で見分ける。終止形(ラ変は連体形)に接続していれば推定・伝聞、連体形・体言に接続していれば断定と判断できる理由を、両者の成り立ち・性質の違いにふれて説明せよ。(記述)